

ゆめ工房

Vol. 21

アクティブ・ラーニング その2 授業のイメージ

- ◇ 次に、「アクティブ・ラーニング」の授業についてのイメージを、いくつかの文献や資料をもとにまとめてみようと思います。
- ◇ 授業イメージを明確にするために、まず『知識と能力』についてまとめてみます。
今、知識と能力について、「能力は様々な知識や技能の集合体であり、それらがネットワークのように張り巡らされ、実際の場面とつながることによって実社会で活用できる汎用的能力となる。ネットワーク化された情報は、剥がれにくく、失われにくい。(大阪大学:池田光穂氏)」という考えがもっとも分かりやすいと思っています。言い換えれば、**一斉画一的な受動的な授業で身に付けた知識は、一つ一つがバラバラのピースであり、それは実社会で役に立つ汎用的能力になりにくい**ということなのでしょう。
このことから、アクティブ・ラーニングの授業では、知識をただ覚えるだけの授業から、**知識をネットワーク化し、そこから新しい知を創造していけるようにする授業への転換**が求められていると考えられます。このことについて、田村学氏（前文科省教科調査官）は「**アクティブ・ラーニングとは、アクティブに活動する授業というよりも、頭の中がアクティブに活性化している授業と捉える**」と言っています。言い得て妙ですね。
- ◇ そこで、アクティブ・ラーニングの授業イメージですが、私がいろいろな資料を見る中で一番分かりやすかったものを紹介します。それは、田村学氏（前文科省教科調査官）の著書「授業を磨く」に書かれていたものです。

汎用的能力の育成は、**プロセス（学習過程）とインタラクション（相互作用）の充実によって実現される**

プロセスとは学習過程のことです。今、山口県が推奨しているプロセスは「めあての明確化とそれに対応したまとめとふり返し」です。このことに反論するつもりはありませんが、どうも型にはまりすぎた学習が横行している気がします。8月に出された「審議のまとめ」には「アクティブ・ラーニングは特定の型を普及させるものではない」と明言されています。そこで、「めあてとふり返し」の間にある学習活動を工夫することが大事だと捉えました。どんな学習を仕組めば、子どもたちが主体的で能動的な学習ができるようになるかを考えなければいけないということです。ここには、「相互作用」が必要だということが田村氏の言葉にあります。子どもたち同士が関わりながら学びを深めていく手立て、つまり、授業に「学び合い」を取り入れることによって、**授業の中に、思考・判断・表現するなど、子ども一人ひとりが能力を発揮する場面を位置づけることのように**です。能力の育成に向けたアクティブ・ラーニングを実現するために、自分の思いや願いを実現したり、課題を解決したりするプロセスの充実を意識することが重要なのでしょう。

かなり大雑把ですが、このような授業を、アクティブ・ラーニングの授業イメージだと考えています。

- ◇ プロセスを田村学氏の著書「授業を磨く」からもう少し掘り下げてみます。

授業を作るために大切なことは、自分がやろうとする**授業のイメージを豊かにもつ**ことがポイントだと書かれています。この授業のイメージには**2つの視点**があるそうです。1つは**単元としてのイメージ**で、もう1つが**1時間の授業イメージ**です。

* **単元のイメージづくり**は、「**発想・構想・計画**」という**3つの段階**で考える。

【発想の段階】「子どもの興味・関心」「教師の願い」「学習活動や教材」という視点から考えます。ただ、教科の場合、教科書というものがありますので、ここを強く考えることはないかもしれないということです。

【構想の段階】ここでは、教師の願いが優先される学習（内容に基づく単元）と子どもの興味・関心が優先される学習（経験に基づく単元）という視点から授業構想を考えるとよいようです。ここでのポイントは、いかに両者のバランスをとるかということだそうです。

【計画の段階】一連の問題解決の流れと子どものスムーズな意識の流れに沿った展開として整えます。単元計画の中に、話し合いや交流、伝え合いや発表等の表現活動をどう位置づけるかを考えることだそうです。

* **1時間の授業のイメージづくり**は、「**見取る・見通す・具現する**」という**3つの段階**で考える。

【見取る】子どもの姿（実態）を確実に捉えます。そのために、①子どもの姿を継続的に見取る ②子どもの多様な姿を見取る ③子どもの姿を想定して見取るという視点が大切だそうです。

【見通す】子どもの姿がどのように変容することを期待しているかを考えます。これは、指導案作成では、「本時のねらい」に書かれることだそうです。この時、「～について工夫して取り組んでいる」「～について考えている」という曖昧な表現ではなく、できるだけ具体的な姿として考えることが大事だそうです。

【具現する】「見取った子どもの姿」と「見通した終わりの姿」を具体的に結びつけるということです。ここで、前述したように、どういう具現を行えば、子どもたちが主体的で能動的な学習活動に取り組むことができるかを考えるわけです。「どのような学習活動を設定するか」「どのような学習環境を構成するか」「どのような言葉かけで学び合いを仕掛けるか」などを考えます。

◇ 次に、**相互作用**の部分ですが、これは「**かかわり**」をどう仕組むかと思っています。ここでは「**教師の仕掛け**」「**子どもの能力を育てる**」という2つの視点から考えるとよいと思っています。

【教師の仕掛け】

教師は、子どもが主体的になる場づくりと協働的になる場づくりを仕掛けます。そのことについて、田村氏は「主体的」に取り組むことや「協働的」に取り組むことで「学びが深まった」というよさを実感させる必要があると述べられています。

また「ふり返り」の段階でも、他者と相互に関わり合う中で、自分の考えをまとめて表現できたことや、新たな知を生み出すことができたことを経験させるように仕掛けていくことが大事だそうです。

【子どもの能力を育てる】

教師がどんなにいい仕掛けをしようとも、子どもたちに能力が育っていないと難しいものがあります。そこで、子どもたちに「**学び方**」を育てることをお薦めします。「**学び方**」の基盤は**意欲づくり**です。子どもたちが学びに意欲を感じるためには「**個が生かされた集団づくり**」が必然です。私たちが本気になって子どもたちの能力を高めていきましょう。

以上、アクティブ・ラーニングの授業づくりについてまとめてみました。

文責 スギタ